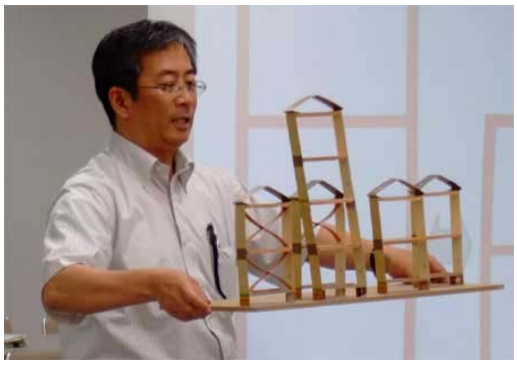
特別第2分科会
基調講演

名古屋大学大学院環境学研究科教授

ふくわ　のぶお
福和　伸夫 氏



プロフィール

名古屋大学大学院修了後、建設会社に勤務ののち、同大学工学部助教授、先端技術共同研究センター教授を経て現職。

現在は、建築の教育・研究に携わる傍ら、地域の防災まち作り活動を実践している。主として、建物や都市を地震に強くするための教育・研究を行うとともに、防災活動を活性化するための教材の開発や地域での防災普及啓発活動を行っている。

これらの研究・教育・啓発活動に対し、文部科学大臣表彰科学技術賞、日本建築学会賞（論文）、日本建築学会教育賞、地域安全学会技術賞などを受賞している。

また、中央防災会議専門委員、総合科学技術会議専門委員、地震調査研究推進本部委員をはじめ、中央省庁や、愛知県、名古屋市など自治体の防災関係の委員を歴任している。

提言の要旨

阪神淡路大震災以降、大地震が頻発している。これらの地震の殆どは、週末や休日、早朝や深夜に発生したので、学校で死傷した生徒はいない。これは単なる幸運に過ぎない。今後、東海・東南海・南海地震、宮城県沖地震、首都直下地震などの大地震が切迫していると言う。理由は単純である。過去に繰り返し起きているからである。

東海・東南海地震を例にすると、1498 年、1605 年、1707 年、1854 年、1944 年と、90 年～150 年の間隔で発生している。政府地震調査委員会によると、今後 30 年での地震発生確率は東海地震が 87%（参考値）、東南海地震が 60～70%とされている。今の子供たちは、ほぼ確実に現役時代にこれらの災害に遭遇する。

これらの地震が起きると、西日本が広域に被災する。地震発生の前後には、内陸での地震活動も活発になるようだ。このため、地震の活動期は時代の転換期になりやすい。

大正末期から戦後にかけて見てみると、1923 年に関東地震が発生、その後、1925 年北但馬地震、1927 年北丹後地震、1930 年北伊豆地震、1933 年三陸地震津波、1943 年鳥取地震、1944 年東南海地震、1945 年三河地震、1946 年南海地震、1948 年福井地震と続いた。この間に、1925 年治安維持法、1927 年金融恐慌、1931 年満州事変、1936 年 2.26 事件、1937 年日中戦争、1941 年太平洋戦争、1945 年敗戦と、様々な出来事が発生した。関東地震と、金融恐慌や軍国主義化、東南海地震や三河地震と、戦争の終結など、地震と歴史は無縁とは思えない。1854 年安政の地震の時には江戸の終焉

と、1707 年宝永の地震は元禄の繁栄の終焉の時期と重なる。しかし、このような歴史を学校で学ぶことはない。

予見できている災害に対し、被害軽減のための行動をとることは、現代に生きる私たちの責務である。しかし、減災対策は進んでいない。これは、私たちがバーチャルな現代社会に犯され、社会の脆さや目の前に迫る危機に対して感受性を失ってしまっていることに原因がある。しかし、現実には、現代社会の実態は災害に極めて脆い。今の親や教師の世代は、戦後の高度成長期に育ち、大きな災害を殆ど経験していない。災害の怖さを知らない親や教師に育てられた子供たちに逞しく生きる力がどれだけ有るか不安を感じる。

戦後の都市への人口集中は、軟弱地盤への都市の拡大と、建物の高層化・密集化を助長し、災害危険度を高めた。揺れがより強くなり、延焼危険度や同時被災危険度が増している。

また、現代は、電気・ガス・上下水・通信・交通網に頼りきっている。都市の中では、高速電車や地下鉄・自動車が横移動を、エレベータが縦移動を高速化し、まちの拡大と高層化を支えている。家庭には、電化製品が溢れ、コックをひねれば加熱や給水・給湯ができ、便所も水洗で暖房便座・洗浄機付き、電話・携帯・メールで通話・通信をし、インターネットで情報検索、という便利な時代になった。

かつてと比べ、人間力・社会力・家族力・地域力も減退している。都市の人工環境で暮らし、自然と隔離され、自然の良い面だけを見て、便利さや快適さ・楽しさを優先し、過度な行政依存となり、家族や地域での互助・共助の力も弱っている。子供たちも、屋外で友達と集団で遊ぶ機会が減り、個室でゲームの一人遊びをしている。

また、効率重視の「中央集約型」の現代社会は、かつての「自律分散型」の社会と比べ、災害に対して圧倒的に脆くなっている。社会の持つ防災力を上回る被害が発生し、ライフラインが途絶したとき、あらゆるものに頼りきった社会はどうなるだろう。

これに対し、戦前は、まちは揺れの小さい洪積台地に位置し、建物も平屋が多く、隣棟間隔も離れていた。高速の移動手段がなく、まちはコンパクトで、建物も低層だった。倒れる家具も無い。帰宅困難問題もないし、地下鉄やエレベータへの閉じ込めの危険もない。蒸気機関車は電気がなくても走れる。電化製品は電灯だけ。風呂や煮炊きは薪、井戸水や汲み取り便所を使い、ガスや上下水道に頼ることもない。

しかし、今の子供たちにとって、戦前のような生活を戻ることは難しい。であれば、今の社会を守り抜くために、大人たちは、地震で壊れないまちにするしかない。そして、子供たちに災害に負けない「生きる力」を授けることが必要である。

第１５期中央教育審議会第１次答申によれば、「生きる力」とは、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協同し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性、それにたくましく生きるための健康や体力。」と記されている。まさしく、大地震を前に子供たちが獲得しておくべき力である。

そこで、パネルディスカッションでは、研究者、教育者、親、学生、個々の立場で、災害に負けない力について考えてみる。